ふるさと歴史民俗散歩

第22回

人の顔を思わす「屏風岩石材石蔵」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問　柏村　祐司

大谷街道が大谷の町に入るとやがて二手に分かれる。大谷寺方面に向かったすぐの所、道路の北側に屏風岩石材の二棟の石蔵が並び建つ。この二棟の石蔵は、規模といい意匠といい、石の町大谷を代表する建物として親しまれている。

これら二棟の石蔵は、真ん中の冠木門を挟んで東西に位置する。西側の蔵は通称「西蔵」と称され、明治四十一（一九〇八）年の竣工で、座敷蔵として建築されたものである。一方、東側の蔵は通称「東蔵」と称され、明治四十五（一九一二）年の上棟で、穀蔵として建築された。

風格漂う屏風岩石蔵

二棟の石蔵は、ほぼ同じ規模のもので、外観はともに軒や窓飾り、壁面の扱い等、大谷石蔵では珍しく濃厚な洋風意匠でまとめられている。なかでも西蔵は、貴人の応接に相応しく、屋根は寄棟造り、窓の上部がアーチ状でそれに合わせて軒屋根もアーチ状にするなど曲線や繊細な装飾を随所に用い、より本格的な洋風意匠を採用している。また、西蔵に設置された三つの窓の配置が人の両目・口のようでもあり面白い。なお、屋根は現在瓦葺きとなっているが、昭和初年発行屏風岩石材部カタログ掲載の写真によれば、建築当初は石瓦葺きであり、写真説明書きにも「家根迄大谷石ヲ使用シタリ」とある。寄棟での石瓦葺きは、技術的にも難しく、西蔵がいかに贅を尽くした建物であったか窺い知れる。一方、東蔵は、切妻造で装飾が直線的であり力強い表現が目立つ。

二棟の石蔵の設計は、当時の店主渡辺陳平が手掛けたといわれる。渡辺陳平は、明治四（一八七一）年城山村の漢方医飯村道硯の三男として生まれ、同二十四（一八九一）年渡辺庄作の養子となり、同三十七（一九〇四）年に家督を相続した。そのころ、渡辺家では大谷石採掘を副業として営んでいた。陳平は大谷石産業の将来性に目を向け、大谷石の輸送力を強化するために荒針・鶴田間に軽便鉄道を敷設、これをきっかけに採掘事業は軌道に乗り、自己の経営する屏風岩石材部は発展していった。さらに宇都宮石材問屋組合を組織する等、大谷石産業の発展に尽くし、「石材王」とも称された人物である。

二棟の石蔵が建てられたのは、まさに屏風岩石材部、および大谷石産業が発展期に入ったばかりの頃である。それまでの大谷石建造物は、幅一尺（約三〇㌢）・長さ三尺（約九〇㌢）・厚さ二寸五分（七・五㌢）に仕上げた石を木組みに貼りつけた貼石工法によったが、輸送力の強化により厚さ五寸（一五㌢）以上に仕上げた石を積み上げた積み石工法が主流になった。

陳平の二棟の石蔵建築の背景には、屏風岩石材の財力の誇示もあったろうが、積み石という新しい工法の開発を機に大谷石の需要を増やす、その見本としての意味合いがあったようだ。ちなみに大正十四年大谷石材採掘販売組合発行の「大谷石案内」に巻頭を飾るように二棟の石蔵の写真が掲載され、その説明書きに「屏風岩石材部渡辺邸模範石造りノ景」とある。やがて積み石工法による石蔵が盛んに建築されると、二棟に用いられた洋風意匠に似通ったものが多く建てられた。特に大谷周辺の石蔵には、西蔵の顔面に似た窓の設置が見られる。愛着ある意匠が人々の心をひきつけたのであろうか。

大谷の石材王渡辺陳平